

1章 寮母の仕事

寮母の献身で支えられてきた施設

特別養護老人ホーム（以下特養ホーム）は、一九六三年の老人福祉法により老人施設として位置づけられました。

特養ホームの入所要件は「身体や精神に障害があるために常時介護を要し、在宅での介護が困難な六五歳以上の人」となっており、経済的条件は問われていませんでした。経済的理由での入所は、養老院に端を発している養護老人ホームでおこなわれることになっていました。しかし実際には特養ホームは、身寄りがなく経済的に困窮した行き場のない高齢者の受け入れ先にもなっていました。

利用料は本人や扶養義務者の所得により決定されるために、中高所得者やその家族にとっては負担額が多く利用しにくいものでした。

私が働くようになったほんの一〇年前の特養ホームでも、入居者がここを「養老院」

と信じ込み、そこに居る自分を「人生の敗者」のように思い、恥じて暮らしているということもありました。入所者の家族も、身内が入所をしていることを近所には隠している場合が少なくなく、「姥捨て山」的な意識が存在していました。

寮母は特別の資格など求められず、主に施設の近くに住む中高年の女性たちが働いていました。医療の必要な虚弱な高齢者や痴呆の高齢者への介護について、今のように多くの情報があるわけではなく、先輩の寮母たちは、病院とは異なる入居者を悪戦苦闘しながらお世話していました。労働環境も整備されておらず、寮母の「献身」に支えられてきたように思います。

今では電動ベッドが当たり前ですが、私の勤め始めたころにはそのようなベッドはほとんどなく、動いたとしても足元にあるハンドルを手動で回しベッドの頭部を持ち上げるといったものでした。今のようにベッド自体の高さが変わるものはなかったように思います。利用者の身体を少し起こしたときには、自分の体を背もたれ代わりにして抱きかかえるようにして介助していました。

車椅子も同様です。そのころ盛んに「寝たきりは寝かせつきりにより作られる」と

言われてはいましたが、今のようリクライニング式の車椅子はなく、座位が保てない人や首の保持ができない人などの離床に悩まされてきました。頭が保持できない人には、寮母が車椅子の背に長いダンボールをはさみ込み、それで頭部を支えるような工夫をしていました。

施設の建物も、廊下幅が広いことと、大きな食堂とお風呂があることぐらいが病院と異なる程度でした。四人部屋が一般的で、一人分のスペースは三畳より少し広い程度です。その空間にベッドと「床頭台（しようとうだい）」と衣類などを入れるための小さなタンスがあります。ベッドには「コールボタン（ナースコール）」がついています。床頭台やナースコールという呼び名も病院で使っていた名前がそのまま使用されていたのです。

虚弱な寝たきりの高齢者や痴呆高齢者のお世話をどのようにしたらいいのかが見えにくく、生活の場であるといいながらも、病院の接遇を真似ながら模索していた時代でした。

夜勤者と日勤者の朝の引継ぎの時にベテランの寮母が、「昨日、Aさんが熱を出し

たので水のみで水を飲んでもらったのですが、寝たままより少し頭を高くしたほうが飲みやすそうなので、これから皆さんもそうしてみてください」というような基本的なことを、新たな発見のように申し送っている時代でした。誰からも教わることがなく、自分の経験を通じて考えていくしかなかったのです。

そのころは「自立支援」という言葉もあまり聞かれず、やみくもにお世話をしていたような気がします。利用者主体の生活を支援するという意識も、正直言ってもありませんでした。

とにかく「お世話」をしていたのです。

「朝は六時になったら部屋のカーテンを開けてみんなを起こして、洗面のタオルを渡し、髪をとかず。男性は髭剃りをして、服を着替えて、七時過ぎにはみんなを食堂に連れていく」という具合に、生活の流れをつくっているのは寮母でした。寮母たちが考えた「入居者に〈良い〉であろう生活」をプログラムし、その流れにそってお世話をしてきたように思います。

介護職は忙しいのに、入居者は寂しい

五〇人の入居者を介護していた頃の私の仕事を振り返ってみました。

◆日勤寮母の一日

五〇人の入居者に対して、日中に勤務している職員の数は一五人から八人程度です。この少ない人数で要介護高齢者の生活支援をするのですから、その人に寄り添う介護というより、フロア内で声を張り上げながら走り回っての介護でした。

八時過ぎに出勤し職員朝礼で昨夜の夜勤の申し送りを聞き、忙しい一日が始まります。風呂日には、朝食の後に排泄介助をしてから入浴介助です。

入居者は、週に二回の入浴が一般的です。普通の銭湯のようなお風呂を一般浴といい、歩いて入浴できる方が対象です。車椅子に座ることのできる人は入浴用の車椅子（シャワーチェア）で入る中間浴、寝たままに入浴するのは特殊浴となってい

ます。

入居者を状態別にいくつかのグループに分け、その日に入浴する人たちは事前に決めており、午前中に何人入れ、午後には何人というように職員は分刻みの業務を必死にこなしていきます。

お風呂介助の方法は、入居者を浴室へ誘導する係、服の着脱の介助をしたり、髪を乾かしたり爪を切ったりする係、浴室の中で体や髪を洗う係などと、分担して介助します。

「○○さん、お風呂ですよ」と声をかけ、お風呂まで誘導します。車椅子を使って自分で風呂場まで来る人もいます。早く来ても、一度に入れる人数は五人程なので、待つてもらうこともたびたびあります。「まだなの、ずっと待っているのに」と叱られたりもします。

時間に余裕のあるときには、「○○さん、この服に着替える?」、「たまには、この服も着ようよ。似合っているのに」と、入居者と一緒に着替えの服を選んだりしますが、忙しいときには職員が決めてしまいます。

お風呂の中では、職員と入居者が「♪連れて逃げてよくついておいでよく（矢切の渡し）」と流行歌を歌っています。決まって「♪清水港の名物は〜」とだみ声を張り上げる人がいます。浴室は蒸し風呂状態で、その中で二時間以上も介助していると「フラフラ」状態になってしまいます。

午前中のお風呂が終われば昼食介助です。特養ホームの入居者は自分で食べることでできる人のほうが少なく、七割程度の方は見守りも含め何らかの介助が必要です。職員一人で二〜三人の食事介助をすることさえあります。

午後もまたお風呂と排泄介助です。

入浴介助の担当でない職員は入居者のケア・コールや、午前・午後の間食介助や、掃除、洗濯物配りなどの諸々の業務に追われています。トイレに行く暇さえありません。寮母ステーションで座るのは記録をするときだけです。それも勤務時間内にはできず、結局動き詰めの日です。

喉が渴いても水を飲みに行くのさえ他のメンバーに悪いと思って我慢してしまい、脱水で倒れそうになることすらありました。

◆夜勤寮母の一日

日勤帯の職員の業務が終わろうとする夕方五時ごろに、入れ替わりに夜勤の職員が出勤してきます。

夜勤は十六時間勤務で二日分の労働となります。五〇人の入居者に夜勤者二人です。昼間の申し送りを聞き夕食の介助、その後口腔洗浄、居室への誘導、寝巻の着替え介助、排泄介助、諸々の雑用などを黙々とこなしていき、気がつくとき夜の十一時を回っています。この時間帯になると少しずつコールが減り、座って仕事をすることができるようになってきます。

夜中の十二時に排泄介助を済ませ、夜間の巡回をし、一時から一時間半ずつ交互に仮眠に入ります。仮眠といっても特別な部屋が用意されているわけではなく、コールの音や足音なども聞こえてきます。入居者に急変があった場合には、もちろん仮眠どころではなくなりません。

入居者の朝は早く、四時過ぎから起きてくる人もいます。夜勤の寮母は「まだみんな寝ているから静かにしてね」と言いながら、自分たちも朝のおむつ交換に取り

掛かります。一斉のおむつ交換です。東側の部屋から西の部屋に向かって「ガタゴト」と排泄の台車を引きながら向かいます。

「○○さん、おむつ交換にきましたよ。起きて」、「○○さん、ポータブルに座らないか?」、「○○さん、おトイレに行きましょう」などと声をかけ排泄介助をしていきます。「さつき行ってきたよ」とか「うるさい」と言われながら、流れ作業のように順番に排泄介助をしていきます。

おむつ交換は適時交換（その人の排泄パターンに合わせて排泄援助をする）が建前にはなっていたのですが、入居者五〇人に二人の夜勤者しかいない夜勤帯にはどうしても一斉交換に近い形をとらざるを得なかったのです。一時間三〇分ほどかけておむつ交換が終わり、後片付けをしていると六時になってしまいます。

次は起床の時間です。フロア全体に放送が流れます。「みなさんおはようございます。起床のお時間です。これから洗面介助にお伺いいたします。準備のできる方はご自分で準備をしてください」

大きなバケツに熱湯をはり、アツアツの濡れタオルを人数分用意します。そして

櫛と電気カミソリ、化粧水などを洗面用の台車に載せ、一部屋一部屋回っていきます。一気にお部屋のカーテンを開けながら「おはようございます。洗面の時間ですよ。タオル熱いですから気をつけてくださいね」などと言いながら、顔を拭き、髭剃りをし、髪をとかし、服の着脱介助をします。このころから早出の職員が出勤をします。

七時からは、朝食に向けてみんなを食堂に誘導していきます。八時からは朝食時間です。九時には職員の朝礼があります、それまでに入居者全員の朝食を終えて、食事の下膳と食堂の掃除、入居者の居室への誘導を終わらせなければなりません。この時間帯はまるで戦場のようです。日勤の職員も加わり、とりあえず「急げ急げ」の業務です。

九時からの職員朝礼が終われば、長かった勤務が終わわり夜勤者はようやく仕事から解放されます。でも、入居者の用事や委員会、行事などの仕事を担当していると帰るのは昼頃になることもざらです。万歩計で夜勤中にどれだけ歩くのかを計ってみたら二万歩以上になっていました。さすがに疲れるはずです。